

2023年6月18日

年間第11主日

菊地功大司教 メッセージ

「収穫は多いが、働き手が少ない」

豊かに実っているにもかかわらず、それを収穫する人が足りない。だから働き手をさらに必要なのだ。そのように理解すると、例えば日本での福音宣教の厳しい現実を目の当たりにして、一体どこにその豊かな実りがあるのだろうかと問いかけてしまいます。

この言葉は、それよりももっと根本のところを問いかけています。つまり神の国の完成のためには、神が求められるこの地上ですべきこと、しなければならないことは山積しており、それに取り組むための働き手がもっと必要なのだという意味でしょう。加えて、この言葉は単に、司祭の召命の必要性だけを説いているものでもありません。もちろん司祭は必要です。しかし同時に、神の国の完成のために働くのは、一人司祭だけではありません。すべてのキリスト者には、それぞれの場で、それぞれに与えられた才能に従って、「働き手」となることが求められています。

主御自身が「働き手」として最初に選ばれた12人の弟子たちも、決して皆が同じような人だったのではなく、様々な性格、様々な才能、様々な思いを持った異なった人たちでありました。まさしく多様性のうちにある人々です。その多様性ある共同体は、「天の国は近づいた」と告知する使命によって一致していました。それぞれが、それぞれに与えられた才能を生かし、異なる方法で、しかし同じ務めを果たすことで、多様性における一致が、弟子たちの共同体に実現し、あかしされていきました。同じように、現代社会に生きる教会共同体は、一つの体を形作る一人一人が、それぞれに与えられた才能を生かし、それぞれに異なる方法で、しかしキリストの福音を告げ知らせるのだという同じ思いによって結ばれるとき、多様性における一致が実現します。

教皇フランシスコは回勅「兄弟のみなさん」に、こう記しています。

「いのちがあるのは、きずな、交わり、兄弟愛のあるところです。・・・それとは逆に、自分は自分にのみ帰属し、孤島のように生きているのだとうぬぼれるなら、そこにいのちはありません (87)」

わたしたちの目の前には、神の国の完成のためにしなければならないことが広がっています。働き手はわたしたちです。わたしたちは共同体の一致の絆のうちに、その務めを果たしていきます。なぜならばキリストの体である共同体にこそ、いのちがあるからです。共同体の絆、交わり、兄弟愛に、わたしたちを生かす源であるいのちがあります。一人では「働き手」の務めを果たすことはできません。ともに助け合いながら、互いの絆を深め、それぞれに与えられた才能に基づいて、社会の中で「働き手」として、収穫の業、すなわち福音のあかしに努めて参りましょう。